

事業概要書

事業名	福島県南相馬の若者たちの心のよりどころ「フルハウス」創設事業				
開始日	2020/3/1	終了日	2020/8/31	日数	184 日
団体名 (カウンターパート)	任意団体 フルハウス				
担当者名	柳 美里	スタッフ人数	3 人		

事業費総額 (税込)	24,764,400 円
CF 事業枠	5,000,000 円
その他資金	19,764,400 円

事業目的	<p>地域住民と、地域にある高校の生徒たちが気軽に集える場所、そして地域で唯一本と触れ合える場所として「ブックカフェ フルハウス」を整備・運営し、無人駅となる小高駅を利用する生徒たちや地域の住民が安全に、安心して電車を待つことができる場所を提供する。また、胸に大きな夢を秘めながらもふるさとを離れることができずにいる若者が作家・劇作家である柳美里と直接触れ合ったりフルハウスで働くことにより、それぞれが夢を掴む後押しをし、その志を支えることで小高を「芸術の発信地」として盛り上げていくことを目的とする。</p>
事業全体の概要	<p>●フルハウスとは</p> <p>作家 柳美里は、福島第一原発から半径 20 キロ圏内は警戒区域と指定され、立ち入りが制限されることが発表された 4 月 21 日に、立ち入りが制限される前に自分の目で見ておかなければとの思いから南相馬の地を訪れた。立ち入り制限が開始される前日のことである。これを機に福島県南相馬市へと何度も足を運び、そのことを知った臨時災害放送局・南相馬ひばり FM からオファーを受け、2012 年 2 月から「柳美里のふたりとひとり」という番組がスタートした。柳美里が南相馬市に深く関わるきっかけとなった出来事である。</p> <p>当初は当時住んでいた鎌倉から南相馬まで毎週のように通っていたが、安全な場所から通いながら住民たちの話を聞くことに違和感を感じ、南相馬への移住を決意。2015 年 4 月に南相馬に転居し、南相馬ひばり FM が 2018 年 3 月に閉局するまで、約 600 人の住人たちとの対話を続けてきた。</p> <p>南相馬市は福島第一原子力発電所から半径 20 キロ圏内の場所であり、旧警戒区域にあたる。2016 年 7 月には、一部の帰還困難区域を除いて避難指示が解除された。しかし、未だ帰還者は以前の 30%程度に過ぎない状態となっている。住民たちは原発事故によって働く場所を失い、学ぶ場所を失い、地域のコミュニティーまでも奪われた。ラジオ番組を通じて住民たちと対話しながら、原発事故が奪ったものの大きさ、そしてふるさとを奪われた人々の悲しみや苦しみを知った柳は、人々が集まって語り合える場所を</p>

作りたいとの思いから南相馬市小高区の小高駅のそばに住居を構え、老若男女問わずに集える場所として、2018年4月、本屋「フルハウス」をオープンさせた。

フルハウスを訪れる人の中には、多くの高校生たちもいる。近くにある小高産業技術高校の生徒達である。生徒の多くは小高区外に住んでいるため、常磐線で電車通学をしている。しかし電車は1時間から2時間に1本しかない。駅の近くには休憩できる場所もなく、生徒の大半が空調設備のない駅舎で電車を待つしかない環境であった。駅の周辺は閑散としており店もまばら、日が落ちるのが早い冬などは明かりも少なく薄暗い。そのような環境の中で高校生たちが安心して電車を待つことができる空間、そして、高校生だけではなく誰でもが気軽に入ることができる地域の集いの場としての役割を担う場所、それが「フルハウス」である。

●取り組むべき課題

もともと過疎の傾向にあった南相馬市は原発事故以降人口減少が加速し、街の衰退が著しく進んでいる。小高駅は500名以上の生徒が利用する駅であるにもかかわらず、駅前には建物も少なく閑散としているような現状。特に冬などは薄暗く、生徒たちにとって安全な環境とは言えない状況が続いていた。このような状況も常磐線の全線復旧によって少しは改善されるかと思われたが、小高駅は完全な無人駅となることが決まってしまった。生徒たちの通学環境のさらなる悪化が懸念されるような状態である。

それに加え、南相馬市は除染作業のために多くの作業員が入っているため男性の人口比率が全国で二番目に高い地域となっており、特に女性や生徒たちが無人駅で電車を待つ事に対し、保護者等から不安の声が上がっている。地域にある復興拠点施設で過ごすことも可能だが、スペースがそれほど広くなく、多くの生徒たちの中には思春期ならではの人間関係の問題でそこを利用しない・できない生徒たちもいる。そういった生徒たちが安全で快適に電車を待つことができる空間が必要である。

また、家族や友達には話せないような悩みや自分の将来についての相談ができる場所、舞台芸術の道に進みたい若者、作家を目指す若者たちが、直接“作家、劇作家・柳美里”と対話し触れ合える場所は彼らの『心の拠り所』となり、夢の後押しをすることにもつながる。

フルハウスがブックカフェとしてオープンすればたくさんの生徒を受け入れられるスペースができるだけでなく、Wi-Fi や電源はもちろんのこと、暑さや寒さをしのぐための冷暖房も完備されており、地域の方から学生までが集える場所となる。駅から最も近い場所にあり通学の見守りもできることから、その整備が急務となっている。

フルハウスの整備が完了しオープンした後は、「生徒達の居場所」「地域の人々が集う場所」としての役割のほか、フルハウスで働きたいという若者を雇用したり、役者や作家を志す若者を支え、後押しする場所としての役割も担うことになる。それらの役割を十分に果たすために、持続可能な運営体制を整えることが重要な課題となる。

●パートナー協働プログラム対象事業

人々が集う場所として「ブックカフェ フルハウス」をオープンさせることが最優先。まずはカフェの整備を急ぎ、人員配置をはじめとした運営体制を整える。

また、“そこに行けば誰かに会える場所”、「フルハウス」の存在が、地域の人々の安心感や安らぎにつながり、思春期の生徒たちにとって「自分を受け止めてくれる場所」「夢の後押しをしてくれる存在」であるフルハウスが継続的に運営していくことは、この地域にとって非常に大きな意味を持つ。柳美里本人が選書し、週末には有名な作家がイベントなどで訪れることから、本の販売利益やイベント収入はある程度見込めるものの、より継続的な経営のための仕組み作りが必要である。そのためのひとつとして非営利型の一般社団法人として登記し、組織の強化をはかり、継続運営のための方策を検討する。

●期待される効果

- ・地域の住民、小高駅を利用する生徒たちが気軽に立ち寄れる場所を提供することで、失われた地域のコミュニティーの再生、世代間交流をはかることができる。
- ・無人駅となる小高駅周辺は安心して電車を待つことができる場所が少ない。Wi-Fiがあつてスマホの充電ができ、無料のウォーターサーバーが使えて、夏は涼しく冬は暖かい、そんな快適に過ごせる場所があれば、生徒が安心して通学できる環境となり、生徒の保護者や地域住民の安心に繋がる。
- ・思春期の生徒たちの中には家族や友達には相談しにくい悩みを抱える生徒も多い。そのような生徒たちにとって、柳美里は「人生の先輩」であり、良き助言者となり得る。生徒たちの駆込み寺のような場所があることで、不登校や引きこもり等を防ぐ効果も期待できる。
- ・作家・劇作家である柳美里のもとで働きたい、自分の夢のために働く場所が欲しい、という若者たちと直接交流を持ち、彼らの夢を応援しながら、南相馬を「芸術の発信地」として盛り上げる第一歩とする。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
①小高駅を利用する生徒たちが安心して電車を待つことができる居場所、地域住民が集える場所、夢を叶えるために福島で頑張る若者たちの後押しをする場所として「フルハウス」を整備し、運営する。	小高産業技術高校生徒約 500 人、南相馬市周辺住民約 6 万人
②任意団体「フルハウス」を非営利型の一般社団法人として登記して組織強化をはかり、継続的な運営の仕組み作りを検討する。	小高産業技術高校生徒約 500 人、南相馬市周辺住民約 6 万人